

## 2 『キャッツ』の原作とT. S. エリオット

ミュージカル『キャッツ』(*Cats*)はブロードウェイとウエスト・エンドのミュージカルという印象が強く、日本でも劇団四季により1983年から上演されるなど、ロングラン公演となっている。2019年にはアメリカ・イギリスで映画化されるなど、根強い人気がある。この『キャッツ』の原作者の**T. S. エリオット**(**Thomas Stearns Eliot, 1888-1965**)は、ノーベル文学賞を受賞した20世紀初頭の欧米を代表する詩人兼評論家である。

### ●原作者T. S. エリオット

エリオットは、アメリカ合衆国ミズーリ州セント・ルイスの生まれである。1906年にハーバード大学に入学し、フランス文学、古代・近代哲学、比較文学などを学んだ後、再び1911年末にハーバード大学へ戻り、サンスクリットと古代インド哲学の研究にのめり込む。1914年にドイツに留学するが、戦況が悪化したことから、イギリスに渡りオックスフォード大学で哲学を学ぶ。この時以来、ロンドンに定住し、イギリスに帰化する。1927年には、イギリスで生活していくという決意から、イギリス国教会で洗礼を受ける。1948年にはノーベル文学賞を受賞する。1907年受賞のジョゼフ・ラドヤード・キップリング(Joseph Rudyard Kipling, 1865-1936)、1925年受賞のジョージ・バーナード・ショー(George Bernard Shaw, 1856-1950)、1932年受賞のジョン・ゴールズワージー(John Galsworthy, 1867-1933)に次いでイギリスで4人目のノーベル文学賞受賞であった。代表作に「ブルーロック詩集」(“*Prufrock and Other Observations*,” 1917)、『荒地』(*The Waste Land*, 1922)、『四つの四重奏』(*Four Quartets*, 1943)などがあり、その他数々の評論がある。

### ●『キャッツ』

ミュージカル『キャッツ』の原作は、T. S. エリオットによる詩集『キャッツーポッサムおじさんの猫とつき合う法』(*The Old Possum's Book of Practical Cats*, 1933)である。このエリオットの詩を基に、1981年に**アンドリュー・ロイド・ウェバー**(**Andrew Lloyd Webber, 1948-**)が作曲した作品である。題名にあるポッサムは、エリオットと並ぶ20世紀を代表する詩人**エズラ・パウンド**(**Ezra Pound, 1885-1972**)がエリオットにつけたあだ名であり、エリオットはポッサムを自分自身に重ね合わせている。

ミュージカルの内容は、街の片隅にあるごみ集積場で催されるジェリクル舞踏会に集まった様々な性格をもつ猫たちの中から、長老猫がジェリクルキャッツ（人間に飼い慣らされることなく、逆境に負けず生きがいを見つけ、行動力をもつ猫）を一匹選び、最後にその選ばれた一匹の猫が天に昇り、ジェリクルキャッツとして新しい命を与えられるというものである。しかし、原作は15編構成で、それぞれ「おばさん猫ガンビー・キャット」(“The Old Gumbie Cat”)や「あまのじゃく猫ラム・タム・タガー」(“The Rum Tum Tugger”), 「泥棒コンビ猫マンゴジェリーとランベルティーザ」(“Mungojerrie and Rumpelteazer”), 「猫の魔術師ミストフェリーズ」(“Mr. Mistofffeles”)など、1篇ごとに独立しているため、全体を通しての物語性はない。

エリオットは、軽快な詩のリズムと韻で猫たちのユニークさや華やかさを表現しているが、その一方で、社会の底辺にある者たちの生き様も描いている。猫を題材にする中で、周囲から理解されず、生活苦に喘ぎ、時に差別さえ受ける者たちに焦点を当てているのである。エリオット自身、セント・ルイス生まれの名家育ちで、一流の進学校に通っていたが、ハーバード大学に進学し、ボストンに移り住んだ際、アメリカで最先端の街でありながら、見かけだけの美しさをひけらかしている人や、教会に通いながらも実は宗教など全く信じていない人に接する中で、人間とは何かについて思い悩むようになる。同時に、例え貧しくても人生を謳歌することの重要性に気付く。『キャッツ』の中では、この裏社会で生きる人々を猫に重ね合わせることで、外見の美しさにとらわれることなく、自分らしく生き生きとたくましく生きることの素晴らしさが描かれているのである。そして、本当に救われるべきであるのは、偽善者ではなく、むしろこの弱者たちであることが暗示されている。

### ●エリオットの詩と評論

エリオットの詩は、時には『キャッツ』に見られるようなミュージカルの要素を含み、時には哲学的な奥行きがあり難解なものもある。美しいものを美しいと表現するような詩人ではなく、人間をあらゆる角度からを見渡して創作している。詩だけでなく、例えば批評「伝統と個人の才能」(“Tradition and the Individual Talent”, 1919)では、詩の読み方を教示する中で、歴史、精神史、哲学、宗教、社会評論などを説いている。エリオットの作品の根底には常に悩める人間像や歴史的伝統がある。

(遠藤 花子)